

121212 ウスタビガのマユ

葉を落とした冬の雑木林を歩いていると...

木の枝から、まるで“提灯”(ちょうちん)のように、黄緑色の繭(まゆ)がぶら下がっていました。

こんなに美しい繭、どうしてこれまで見つけることができなかったのでしょうか？

図鑑で調べてみると、「ヤママユ」の仲間で「ウスタビガ」という蛾の「繭」のようです。

この種は、卵の状態越冬、4~5月に孵化、6月中頃に繭を作って蛹(さなぎ)になります。

そして秋も深まった10~11月頃に羽化、迫り来る冬を前にあわただしく産卵してその一生を終えるのです。

(成虫には口が(退化していて)無いそうです...)

幼虫の食草はクヌギやコナラ、サクラ、ケヤキなどですので、この美しい繭が使われる時期(6月中頃~11月頃)にはまだ葉が茂っていることから、気づかなかったのでしょうか。

羽化して繭が空っぽになる頃がちょうど落葉期、冬枯れで褐色が一面に広がる雑木林の中で、この若葉のような黄緑色の繭が、俄然目立つようになるのでしょうかね。

さて「ウスタビガ」、漢字では「薄手火蛾」や「薄足袋蛾」と書くようですが、繭の形が「提灯(手火)」や「足袋」に似ているところからの命名でしょうか？

枝にぶら下がっている繭に近づいてよく観察すると...

上部には羽化するための出口が、下部には繭の中に入った雨水を抜くため(と思われる)穴が開いていました。

ところで...

「ヤママユ」の繭からは高級な絹糸がとれますが、こちらの繭も鮮やかな黄緑色をしているものの、冬になると色あせて薄黄色になってしまいます。

一方「ウスタビガ」の繭は冬になってもまだ鮮やかな黄緑色を保っていますので、さらに高級な絹糸がとれるのではないかと、思うのですが...

(繭が小さくて採れる糸の量も少ないとか、飼育が難しい等の理由があるのでしょうかね...)





